

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)

大学院学生研究

2016年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	英米文学専攻
研究代表者 (2017年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・英米文学専攻 博士課程後期課程四年	熊谷 めぐみ 印	
指導教員	所属・職名	氏名	
	文学研究科・教授	藤巻 明 印	
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> 共同 名
研究課題	ディケンズ後期作品を中心としたヴィクトリア朝小説におけるロンドンの表象		
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2017年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・英米文学専攻 博士課程後期課程四年	熊谷 めぐみ	
研究期間	2016 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 200,000 円 / (採択金額) 200,000 円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

チャールズ・ディケンズの作品におけるロンドンの表象を分析する。The Uncommercial Travellerを中心に、ロンドンをめぐるリテラリー・ツーリズムとディケンズ作品との関係を探り、表面的な共通点にとどまらない両者の結びつきを明らかにし、作品研究へと考察を深めることで、新たな視点からディケンズ作品におけるロンドン表象の分析を試みる。文学的インスピレーション、過去への憧憬、安全なまま越境し、日常に帰還したいと願う欲望、といった観点から両者の共通点を示すとともに、ディケンズの分身といえる語り手の「旅人」の越境が、安全な帰還を必ずしも約束するものではない恐怖と魅力を孕んだものであったことを、ディケンズの伝記的背景や創作との結びつきから考察する。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ Charles Dickens } { ロンドン } { リテラリー・ツーリズム }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

ディケンズ後期作品を中心としたヴィクトリア朝小説におけるロンドンの表象をテーマに研究を行い、リテラリー・ツーリズムの研究にも着手した。これまでの研究では主にディケンズ後期の長編小説に焦点を当てていたが、1860年から1869年までの間、ディケンズが編集長を務めた雑誌 *All the Year Round* に不定期掲載された 36 篇のエッセイから成る *The Uncommercial Traveller* (以降 *UT*) を研究題材として選び、またディケンズの伝記的背景や、ロンドンとディケンズが現代に至るまでの間、いかに密接なイメージで結び付けられてきたか、などの文化的背景について掘り下げることで、研究に新たな視点を盛り込んだ。研究成果として、立教英米文学会で口頭発表を行った。

文学旅行、リテラリー・ツーリズムは近年英文学において研究が進み始めた分野で、社会学や歴史学、観光学などに遅れを取り、研究対象としては軽視されてきた領域と言える。19世紀はリテラリー・ツーリズムが中産階級にまで広がり、商業的な成功も治め、地理的にも交通手段の発達により広がった時代であり、ディケンズら作家たちも、作家の家や墓地をめぐる。一方、「ディケンズのロンドン」という言葉は、19世紀からすでに旅行ガイドなどに多用され、また、2012年のディケンズ生誕200年を記念し出版されたディケンズ関連の書籍の中でも、Lee Jacksonの *Walking Dickens' London* のようなガイド本が複数出版されるなど、「ディケンズのロンドン」は現代に至るまで、ロンドンをめぐるリテラリー・ツーリズムにおいて、注目を浴び続けてきた。「ディケンズのロンドン」は、ディケンズのテキストやゆかりの地を徹底的に検証することなどによって今もなお、発掘され、検証され続けている。しかし、ロンドンをめぐるリテラリー・ツーリズムとディケンズ作品との結びつきについては、未だ多くの研究の余地を残している。Alexis Easleyが言うような、文学観光を楽しみ歩き廻る観光客と、小説の素材を求めて街を歩き廻るディケンズの姿との関連性の指摘はなされているが、本研究では、リテラリー・ツーリズムと歴史的時間について分析した Alison Boothの論を手がかりに *UT* を検証することで、作品研究へと考察を深め、新たな視点からディケンズ作品におけるロンドン表象の分析を試みた。

ディケンズ作品とリテラリー・ツーリズムの関係を探る上で、ロンドンを歩くディケンズのイメージについて考察した。*UT* では、語り手は、商用目的でなく fancy、空想を扱った旅人であることを最初に打ち出す。その旅の目的地の多くがロンドンであり、この作品自体が、ロンドンの観光案内的役割を果たすことにもなっている。ディケンズの分身ともいえる本作の旅人の目立った特徴の一つが、街を「歩く」という行為そのものに執着している点である。長距離の散歩を日課としていたディケンズにとって歩くことは一種の治療法の役割も果たしていた。通りや群衆を内包したロンドンの街を夜に歩き回りたいという切実な欲求を友人への手紙に記してもいる。ディケンズは故郷に家を購入した後も、変わらず深夜のロンドン歩きを続けていた。*UT* の旅人にも強く投影された強迫観念に駆られた街の徘徊者というイメージは、都市の遊歩者として捉えるだけでは不十分な印象を与える一方、過去への郷愁を求める点で、リテラリー・ツーリストとの共通点を示している。

Boothは、リテラリー・ツーリズムは、その初めから、歴史的時間に対応し抵抗もすると指摘し、またそれは、読者の想像力の動きと旅行の動きが互いを模倣し、作家と読者によって登場人物たちの時空世界へ変化した現実世界の舞台を訪れるものであると指摘している。ここで時空世界は多くの場合過去へと変容するものであり、リテラリー・ツーリストが、場所を移動しながら、その場所を媒介にして、時間も過去へと移動するように、*UT* における旅人も、物理的な距離を移動しながら、彼の想像力、fancyを媒介にして過去をめぐる旅をする。社会の大変動のただ中であつたヴィクトリア朝社会においては、失われゆく田園風景と失われた自分の幼年期の思い出を重ね合わせ、記憶の中の場所を再訪する行為についての言及が多くみられる。作中の旅人もまた、ディケンズが靴墨工場で働かされる前の幸福だった時代を過ごしたケント州チャタムを思わせる“Dullborough Town”を訪ねる。旅人は、失われた楽園を求め意気揚々と旅をするが、彼を待っていたのはすっかり変わってしまった故郷の姿だった。変わり果てた故郷に帰って来たのは、変わり果てた自分自身であつたことに気がついた時、旅人は永遠に楽園が失われたことを実感する。

研究成果の概要 つづき

ここで、現実の故郷再訪に幻滅した旅人が、失われた楽園を回復する場所が、ロンドンであることは注目に値する。“Arcadian London”では、旅人は、一人きりで瞑想にふけりたいという気分になり、イングランドでもっとも人気のない場所であるロンドンで六週間の下宿を始める。人々が行楽に出かけ、人影まばらになる時期であるとはいえ、歩道を歩きながら「牧歌的な気分」に浸り、「黄金時代」の秋を迎えたロンドンを称える旅人の視点は興味深い。旅人の本来の故郷は失われ、記憶の中にしかない場所になったため、実際に再訪することは適わない。夢想することはできても、歩き回るとは幻滅を伴うものとなった。しかし、過去の黄金時代をめぐることは、旅人の専売特許である fancy を使うことによってのみ可能である。絵のように美しいロンドンの黄金時代は終わりを告げるが、それは秋の観光シーズンになれば再び想像力を媒介にしていつでも訪れることのできる黄金時代であり、失われたからこそ、安心して郷愁に浸ることができる場所として機能するようになる。リテラリー・ツーリズムが、想像力の切符を持ち、場所を訪問し、作品を媒介に旅することを許される時間旅行だとすれば、*UT*の旅人が fancy を媒介に歩き回ることによって失われた過去へ旅する時間旅行は、リテラリー・ツーリストたちのそれと平行であると言える。Booth はまた、リテラリー・ツーリズムとは一般に、不気味なものに対する誘惑だけでなく、ノスタルジアやホームシックによって引き起こされる過去への振り返りであるとし、文学散歩は多くの場合、幽霊散歩を兼ねている、と指摘するが、旅人はまさにそのような過去への振り返りを fancy を媒介に行っており、同時に幽霊散歩を楽しむツーリストのように、*UT*の旅人もまた不気味なものを求める。

ディケンズを語る上でしばしば引用され、彼の作品を読み解く鍵の一つとされるのが、“The City of the Absent”で言及される、‘attraction of repulsion’、嫌悪の魅力である。不気味なものに惹かれる旅行者たちは、日常を離れて、一時的に境界を越えたい、時には死の境界をも、と願う。ディケンズもまた、その衝動を作品に書いている。旅人の旅は常に想像力を媒介とした越境の旅になっているが、“Night Walks”では、夜のロンドンを歩くことで、様々な境界を漂う姿が描かれる。劇場や監獄、精神病院を徘徊し、境界のゆらぎを体験する旅人は、生と死、狂気と正気の境の曖昧さを自問し、夢と現の境界をも読者に提示する。旅人は、夢を見るはずの夜に放浪し続ける身であるという点において、夢と現、狂気と正気の狭間を漂う存在となる。“Shy Neighborhoods”でも、夜道を眠りながら歩き続け、詩作を行う夢遊病者のような旅人の姿が示される。ここでは夢が、越境の場としてだけでなく、創作にインスピレーションをもたらす大きな役割を果たしていることがわかる。また、夢を見るようにあらゆる境界を越えて歩きつづけることが彼の創作欲を大いに刺激したであろうことは明らかである。生と死、狂気と正気、夢と現の境を漂い続ける旅人は、死者たちが蘇り、町中に溢れるイメージを思い描く。ここで、旅人のイメージにおける死者たちの世界が、昼に生者たちが生活するまったく同じその場所に広がっていることは注目すべき点である。旅人は彼の卓越した fancy を持って、夜のロンドンを歩くことで様々な境界のゆらぎを体験し、また読者に提示するが、それはロンドンの街のあらゆる場所が媒介となって初めて可能になる境界を越えた旅と言える。そして、彼の旅は境界を越える時間旅行自体が目的であったことが明示される。

文学的インスピレーションを求めてロンドンを歩き、郷愁を求めて fancy を媒介に過去への旅をするという点でも、安全な場所から引き返すことのできる境界を越えて日常へ帰還するという点でも、リテラリー・ツーリストとディケンズの共通点は、*UT*に見て取ることができる。しかし、少年時代の辛い日々を振り返り、神の救いがなければ泥棒か浮浪児になっていただろう、と書き残したディケンズには、また、死者や精神病患者と自身を同一視してしまう *UT*の旅人には、圧倒的な危機感が存在していることも確かである。ディケンズにとって、存在したかもしれないもう一人の自分の亡霊は、完全に過去のものであるとは言えなかった。常に現実に降りかかってくるかもしれない亡霊、戻れない危険への越境は、ディケンズを悩ませながらも魅了した亡霊であり、ツーリストたちには体験し得ない、彼の創作に不可欠な越境といえるのではないか。

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

④ 学会発表

1. 2016 年度立教英米文学会、2016 年 12 月 17 日、「ディケンズ後期作品にみるヴィクトリア朝ロンドンとツーリズム」(於立教大学)